手結港マリン・タウン・プロジェクト

元運輸省第三港湾建設局　正会員　米澤　朗
運輸省第三港湾建設局　正会員　國田　淳
高知県土木部港湾課　吉岡　正行
高知県夜須町　福永　昌弘
元(財)運輸経済研究センター　正会員　岩瀧　清治
(株)地域開発研究所　正会員　山下　正貴

1　本稿の狙い

マリン・タウン・プロジェクトとは、官民一体で、海のもつ資質を生かした地域づくりを進める運輸省の新しいプロジェクトであり、本稿は高知県夜須町にある地方港湾手結港を主対象とするマリ・タウン・プロジェクト（以下、ＭＴＰと略）開発計画調査の成果をとりまとめたものである。

手結港は、承応１年（1652）、土佐藩の家老、野中兼山の指導によって建設された、わが国最初の掘込港湾と目され、港湾計画上および土木技術上、高い歴史的価値を有する港湾である。その手結港を中心とする夜須町沿岸域には、多様な観光・レクリエーション資源が賦存し、県計画においても、海洋性レクリエーション基地整備の適地として位置づけられている。さらに、手結港では新外港の建設が計画されており、今や、夜須町沿岸域は新たな地域づくりを展開する段階を迎えている。

このような背景に基づき、手結港ＭＴＰ開発計画調査は、夜須町沿岸域を対象に、港および沿岸陸海域の資源を積極的に活用した、海陸一体となった地域振興計画を検討することを目的に実施したものである。

2　夜須町の現状と課題

夜須町は、高知県中央地区の東端に位置し、高知市中央部より東へ20km、車で45分、高知空港から８km、車で20分の時間距離にあり、県都および県外への玄関口に近接していて、観光・レクリエーションの立地条件には恵まれている。

町の総面積は約38km²で、森林・原野が56％を占め、宅地は２％にとどまる。町域は幅約４km、長さ16kmと南北に細長く、中央部を流路延長 9.2kmの夜須川が貫流する。

海岸線長は約３kmで、西側 1/3が砂浜、残りの 2/3が礫浜を部分的にもつ岩石海岸となっている。海岸線一帯は手結住吉県立自然公園に指定され、奇岩もあって変化に富む明媚な海岸景観を形成している。

気象条件は高温多雨であり、年平均気温は17℃内外で、年間降雨量は 2,000mmを超える。降雪はほとんどみられず、南部では降霜も稀であり、リゾート地としては、高い適地条件を備えている。

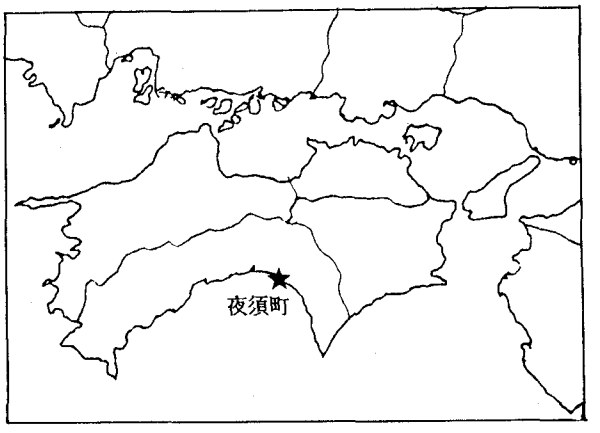

図-1　夜須町の位置

町の人口は、昭和55年までは減少傾向が続いていたが、以後、微増に転じ，昭和58年の総人口は 5,048人となっている。しかしながら、65歳以上人口比は昭和50年の14.9％から昭和55年には17.5％へと増えており、高齢化が進行しているとともに、15歳以上人口が減少しており、人口面での活力はやや弱い。

就業人口の全体数も減少傾向にあり、その産業別構成は昭和55年で、第１次産業35.5％、第２次産業16.7％、第３次産業47.7％と１・３次型就業構造となっている。周辺市町村と比べても第２次産業の構成比が低いこと、就業人口 2,679人のうち町外通勤者が 840人あり、その数が増加傾向にあることが特徴的である。

第１次産業は農業と水産業が主体であるが、いずれも就業人口は減少している。農業は、耕地の連作障害、地力低下が生じており、経営耕地面積、収穫量とも減少しているが、計画対象区域の南端にある塩谷地区は気温も高く、花卉・園芸作物の好適地となっている。水産業はしいら巻網、一本釣が中心だが、生産額は減少しており、低価格魚中心の漁業に移りつつある。漁業の活性化として、昭和61年度より手結漁協直営店「幸の茶屋」が開設されており、新たな観光漁業の試みがなされつつある。

第２次産業は、建設業就業者は増えているが、製造業は横這い状況である。製造品出荷額も減少してきており、県全体の１事業所当り出荷額と夜須町のそれを比較すると 100：14の関係にあり、全般に零細な業態となっている。

第３次産業については、卸・小売業、サービス業の就業人口が増えており、商業販売額も県平均を上廻る成長率で推移しているが、１事業所当りの販売額では県平均の半分の水準にとどまり、購買力の域外流出が目立つ。

観光・レクリエーションに関しては、県立自然公園に指定されている手結住吉海岸、夜須町サイクリングターミナル、月見山こどもの森、土佐カントリークラブなどの資源があり、それらは皆沿岸域に分布しているが、相互の結びつきは十分ではない。入込数は、昭和58年40万人、昭和61年（見込み）49万人と着実に増えており、とりわけ月見山こどもの森（６万人）、夜須町サイクリングターミナル（５万人）が開設されたことにより、土佐カントリークラブ（12万人）も含めて、年間約23万人のベースフローが確保されることとなった。それに加えて、

夏場には約８万人の海水浴客ある。特に、土佐カントリークラブは満杯状態となっており、利用者の年間・週間変動が少なく、１日当り 350人前後の入込があり、そのうち20%は関西方面から来ている。しかしながら、入込数の大多数は日帰りで、宿泊は３万人にとどまる。

さらに、手結港は港湾施設ではありながらも、歴史的観光資源としてのポテンシャルが高い。野中兼山は、土佐藩の経済的基盤を確立し、殖産興業を進めるべく土佐藩の総合的な開発事業に取り組み、港湾、河川、新田、集落等の様々な建設事業を行ってきた。その兼山の地域開発事業は、現在の高知県の社会・経済を成立せしめた大きな基盤条件となるものであり、手結港はその地理的位置および保存状態からして、今や、高知県における地域総合開発の中核的事蹟として位置づけられる。また、江戸時代の港湾構造物において、その規模、建設技術、耐久度、保存度などの点から手結港に優るものはない。いわば、夜須町は、日本で最大、最高の歴史的港湾を有する地域であり、それは夜須町の地域性を語る場合に、最も強い地域個性を構成するものとして位置づけられる。したがって、整備の仕方によっては、手結港は夜須町の魅力を現わす大きな観光資源となる力を有している。

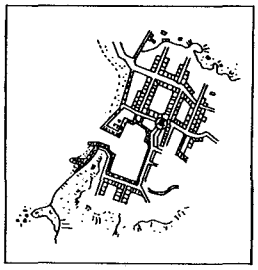

図-2　手結港の古図（江戸時代）

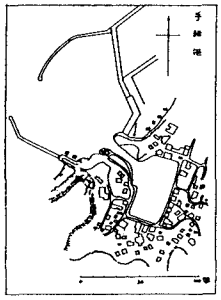

図-3　外港建設後の手結港（大正時代）

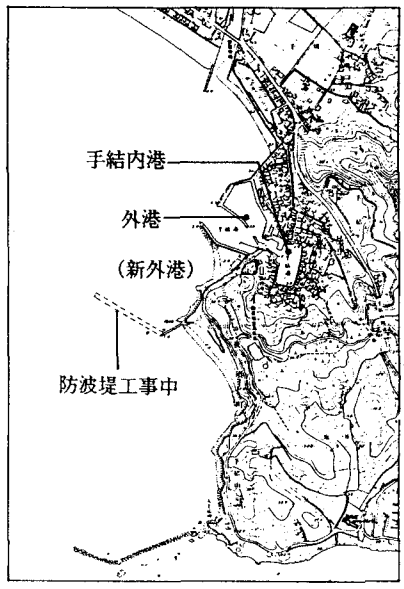

図-4　現在の手結港

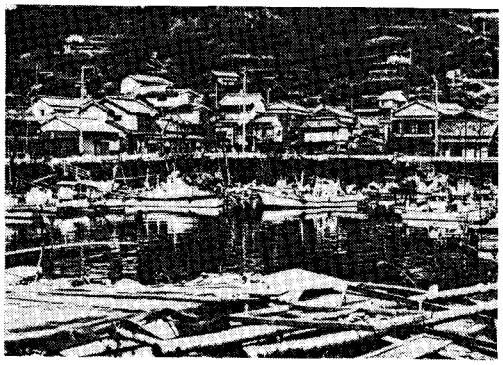

写真 -1 手結港

広域交通に関しては、特に、航空面での大阪とのパイプが太く、所要時間は55分で、ＹＳ機が１日21便飛んでいる。道路は国道55号線が海岸沿いを走っているが、将来的には、四国横断自動車道の開発インパクトが見込まれる。

以上のように、夜須町は社会・経済等、地域の活力が低下してきているが、反面、未開発、未利用なポテンシャルを有していることから、夜須町の今後の活性化課題、すなわち手結港ＭＴＰの課題として、以下の三つを設定する。

●若者が魅力を感じる就業機会の創出

○町が活気をとりもどす最大の資源は若い人達である。そして、彼らが地域に定着するためには、将来を賭けてもいいと決断できる働き場所が地域に用意されていることが必要であり、それが夜須町を浮上させる最大の課題である。

●リーディング産業の確立と既存産業の活性化

○就業機会を創出するには、現在の夜須町の産業ではおぼつかない。したがって、新たな発展の芽をもつ産業を地域のリーディング産業として育成するとともに、既存産業にインパクトを与えて、多角化や計画生産を促し、地域全体の産業振興を図ることが必要である。

●若者の定住意識を高める生活環境づくり

○若者が地域に定着するためには、必要条件としての就業の場づくりに加えて、十分条件とでもいう生活環境づくりが必要である。少なくとも、不快感を感じるような環境を改善し、他地域の人達にも誇れるような優れた生活環境づくりを積極的に図らねばならない。

3　手結港マリン・タウン・プロジェクト開発計画

(1)マリン・タウン・プロジェクトの基本方針

2で示したＭＴＰの三つの課題および夜須町が有する開発ポテンシャルに基づき、ここでは右図に示すような将来目標、基本方針を設定する。

基本方針①については、夜須町の成長産業と目されるものに観光・レクリエーション産業があり、その開発はまだ緒についたばかりであるが、開発ポテンシャルは高いことから地域のリーディング産業として位置づけ、その振興を図って若者にも魅力ある就業機会を創出することを目指すものである。

基本方針②は、沿岸域の中心産業である漁業であることから、最近の観光漁業の試みなどを踏まえ、レクリエーション機能を導入したサービス型漁業を推進し、その効果を既存漁業にも波及せしめて、漁業全体の活性化を図ることを目指すものである。

基本方針③は、手結内港は地域の重要な財産であり、その環境整備は夜須町の生活環境における核心であることからその修景・整備を先行的に進め、地域全体の快適環境づくりに波及させて、特に、若者が定住意識を高められるような町づくりを進めることを目指すものである。

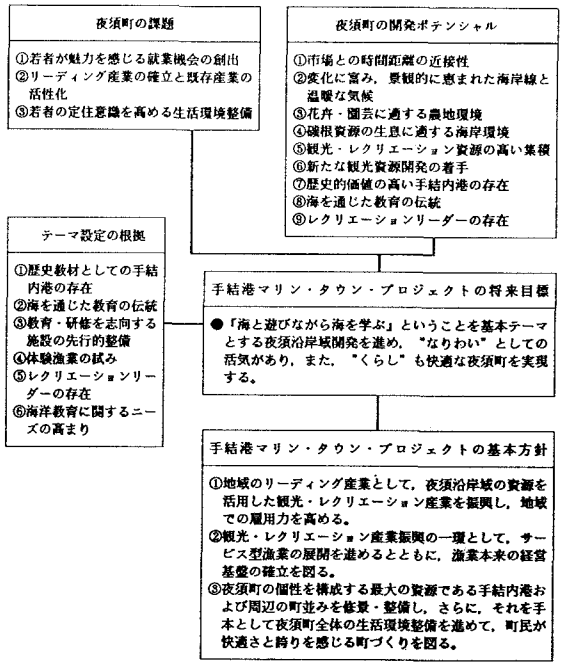

図-5　手結港ＭＴＰの将来目標と基本方針

(2)整備の基本的考えとゾーニング

地域特性をよく反映した沿岸域開発を進めるためには、計画対象地域内の地区の特性を十分に踏まえたゾーニングを行い、適切な機能配置を図ることとする。さらに、各ゾーンが単独で整備・活用されるのでなく、それぞれが有機的に結びついて地域全体としての資源内容を豊富なものとするために、既存のサイクリングロードを中軸とする歩行系・自転車系の円滑な動線づくりを図っていく。また、夜須町沿岸域の観光・レクリエーション開発における利用者層のターゲットは、地域住民は当然であるとしても、やはり、高知県そして戦略的には阪神圏といった広域の週末滞在型の需要層である。したがって、これら広域の市場と夜須町沿岸域を結ぶ利便性の高い基幹アクセス交通路の確保を図ることとする。

なお、以下に、計画対象地域のゾーン区分を示す。

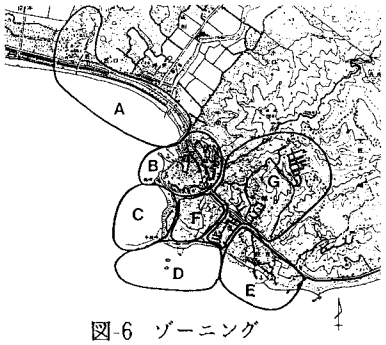

図-6　ゾーニング

表-1　各ゾーンの面積と海岸線長

ゾーン	面積(ha)	海岸線長(m)
A	50	1,520
B	30	540
C	31	660
D	43	740
E	36	900
F	18	—
G	95	—
計	303	4,360

表-2　各ゾーンの特性

ゾーン	ゾーンの特性	資源
Aゾーン	・夜須川河口の両側に広がる砂浜海岸で，左岸側は唯一の海水浴場となっている。右岸側は海水浴利用は少ないが，サーフィンのポイントとなっている。	・広い砂浜海岸 ・手結海水浴場 ・サーフィンのポイント ・サーファーのリーダー ・月見山こどもの森
Bゾーン	・わが国最高級の歴史的港湾，手結内港を核とするゾーンで，周囲の町並みと一体となった地区である。新外港の建設計画が進みつつあり，３世代（近世初頭，明治・大正，昭和末期）にわたる港湾が見られるところである。	・手結内港，兼山波止 ・港町
Cゾーン	・礫浜，岩石海岸が一体に広がるゾーンで，直背後に丘陵地が迫り，開発余地は少ない。かつて，浜茶屋があったが，遊漁がなされている他はレクリエーション的利用度は低い。	・未利用で広い礫浜 ・夫婦岩 ・燈台
Dゾーン	・岩礁地帯であり，磯根資源を対象とする漁業がなされている他は，利用度が低い。	・磯根漁業に適した岩石海岸
Eゾーン	・住吉漁港を中心としたゾーンで，礫浜海岸であり，背後には漁村集落が形成されている。比較的幅のある浜をもっている。	・住吉漁港 ・開発余地のある礫浜
Fゾーン	・塩谷を中心とする丘陵地で，生産性の高い農用地としての利用が進んでいる。夜須町サイクリングターミナルが立地している。	・花卉・園芸に適する温暖な海洋性気候 ・夜須町ｻｲｸﾘﾝｸﾞﾀｰﾐﾅﾙ
Gゾーン	・手結山の南斜面で，海の展望にすぐれている。自然が多く残るゾーンで，調和的な開発が望まれる地区である。	・海の眺望 ・ゴルフ場

(3)ゾーン別整備方針

(2)のゾーニングに基づき、以下では各ゾーンの整備方針を示す。

まず、海岸線を有するゾーンであるが、Aゾーンは広い砂浜を生かして、海水浴をはじめとする海浜のレクリエーション基地を整備するゾーンとして位置づける。Bゾーンは、わが国最高の歴史的港湾、手結内港の歴史的港湾環境を中心とする野外港湾博物館的機能を整備するゾーンとして位置づける。Cゾーンは、マリーナを核とする海洋性レクリエーションの新たな総合基地の整備を達成していくゾーンとして位置づける。Dゾーンは、漁業とダイビングの協調をベースに、レクリエーション利用者参加型の漁場整備を図っていくゾーンとして位置づける。Eゾーンは、漁港機能および漁村集落の集積を活用して、海の幸を楽しみ、漁業を経験できる場づくりを図るゾーンとして位置づける。

また陸域については、Fゾーンは花卉・園芸に適した条件を生かして、体験農業の場づくりを図るゾーンとして位置づける。Gゾーンは手結山の斜面部で、健康づくり、創作活動を楽しみながら、長期滞在できる宿泊施設の整備を図るゾーンとして位置づける。

	整　備　方　針
Aゾーン	《海浜レクリエーション地区整備》 ・海岸防災機能を確保しつつ，海水浴場を始めとした海浜レクリエーションの場づくりを図る。 ・前浜を利用して，訪れた人達が快適に歩ける浜辺のプロムナードを整備する。 ・教育機能も備えた活動的な海のスポーツ基地とする。
Bゾーン	《オープン・ポートミュージアム整備》 ・内港とその周辺の歴史的港湾環境整備を軸として，明治・大正の外港と昭和の新外港までも含めた，港づくりの歴史を表現した"野外港湾博物館"とする。 ・新外港の建設にあたっては，水産関連機能および観光クルージング機能の整備を図るとともに，特に，景観に重点をおいた整備を進め，現代の港湾建設技術の結晶とする。
Cゾーン	《マリーナを核とする海洋性レクリエーション基地整備》 ・第2の海洋性レクリエーション基地として，マリーナ，親水性の高いイベント緑地，釣り施設などを整備する。
Dゾーン	《レクリエーション利用者参加型の漁場整備》 ・自然の磯の活用や，築磯・人工魚礁により栽培漁業の基盤づくりを図る。 ・計画的な漁業生産を図るとともに，広く一般に公開された体験漁業・学習の場とする。
Eゾーン	《漁撈の村づくり》 ・漁港と漁村の集積を活用して，訪れた人たちが海の幸を堪能できる場とするとともに，子供たちの漁村体験の場とする。 ・トローリングなどの遊漁の基地の形成を図る。
Fゾーン	《花木の園づくり》 ・花づくりの場を生かして、訪れた人たちが四季折々の花を観賞することができ、さらに、花の栽培を体験学習できる農園型の体験庭園をつくり出す。 ・併せて、サイクリングターミナルを核とする創作活動の場づくりを図る。
Gゾーン	《分散型宿泊地区整備》 ・手結周辺の魅力にひかれて移り住む人，一時滞在する人たちを対象として，プチコンドミニアム，別荘，ペンション村などの，小規模な宿泊施設が点在する地区の形成を図る。

表-3　基本方針と各ゾーンの対応

基本方針＼ゾーン	A	B	C	D	E	F	G
①リーディング産業としての観光・レクリエーション産業の振興	○	○	○	○	○	○	○
②サービス型漁業の展開を通じた漁業経営基盤の確立		○	○	○	○		
③手結内港および周辺環境の修景・整備を第一歩とする夜須町全体の生活環境整備	○	○	○	○	○	○	

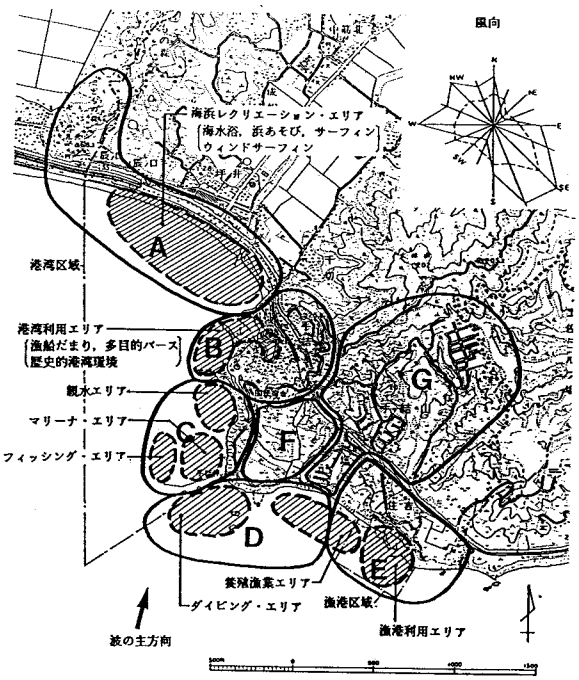

図-7　ゾーン別海域利用構想

(4)ゾーン別整備内容

ゾーン別整備方針に基づき、それぞれのゾーンに導入する施設およびその運用システムをハード・ソフトに分けて、以下に示す。また、施設系の施設配置図を次に示す。

Aゾーン（海浜レクリエーション地区整備）

ハード	●マリン・スポーツ・センターの整備 （Aゾーンの活動拠点および全地域のセンター的機能） ●香南観光センターの再整備 （総合観光情報，物産展示，販売などの機能の強化） ●海浜の整備 ①沖合潜堤等の設置 ②夜須川河口導流堤の付け替え ③プロムナードの整備 ●サイクリングロードの整備 ●宿泊施設の整備 ●交通施設の整備（国道55号線の４車線化，駐車場整備）
ソフト	●海洋スポーツ教育システムの強化 ●海洋スポーツ機材のレンタルシステムの導入 ●防潮堤の修景 ●海洋スポーツイベントの開催

Bゾーン（オープン・ポートミュージアム整備）

ハード	●手結内港の歴史的港湾環境整備 ①石積護岸の復元・保存（天然石による護岸の積み替え） ②臨港道路の遊歩道としての整備 ③手結港歴史公園の整備 ④兼山記念館の整備（古い民家を活用） ⑤港口への架橋（臨港道路における歩行空間の確保） ⑥内港の波浪，ヘドロの除去 ⑦歴史的和船の係留 ●新外港の整備 ①漁業生産基地の整備 ②多目的バースの整備 ③兼山波止周辺の公園・緑地整備
ソフト	●観光イベント船の就航 ●高速沿岸周遊船の就航 ●周辺丘陵地の植栽 ●漁業者による収益施設の経営 ●歴史的港町づくりのためのルールの確立 ●港・海を学ぶ講座の開設

Cゾーン（マリーナを核とする海洋性レクリエーション基地整備）

ハード	●親水性の高いイベント緑地の整備 ●マリーナの整備 ●釣り施設（釣り公園）の整備 ●夫婦岩公園の整備
ソフト	●各種マリンスクールの開催 ●漁業者による遊漁施設の経営 ●水上イベントの開催 ●ホテルシップの係留

Dゾーン（レクリエーション利用者参加型の漁場整備）

ハード	●漁場の整備および資源管理型漁業の振興 ●ダイバーズ・マリン・パークの整備 ●海岸遊歩道の整備 ●海中遊歩廊の整備
ソフト	●有料化システムの導入 ●一般市民による放流事業への投資システムの導入 ●ポートダイビングシステムの導入

Eゾーン（漁撈の村づくり）

ハード	●住吉漁港の整備 ●海の味覚を楽しむサービス施設の整備 ●民宿機能を兼ねた「日本漁家の里」の整備 ●ちびっこ磯公園の整備
ソフト	●体験漁業の導入 ●イベントの開催 ●漁村体験教室 ●漁村民泊システム ●トロール遊漁の実施

Fゾーン（花木の園づくり）

ハード	●フラワーセンターの整備 ●直売所、加工場の整備 ●体験花園の整備 ●ポケットパークおよびフラワーロードの整備 ●子供を中心とする創作活動の場，高知漫画会館の整備 ●野外宿泊施設の整備
ソフト	●花の宅配便システム ●夜須町サイクリングターミナル における臨海学校機能の充実

Gゾーン（分散型宿泊地区整備）

ハード	●プチコンドミニアムおよびペンションの整備 ●ヘルシー・コミュニケーション・センターの整備 ●屋外スポーツ施設の整備 ●「高知工芸村」の整備 ●ゾーン全体としてのインテリジェントリゾート化
ソフト	●生活情報システムの整備 ●地域住民との交流システムの整備 ●高齢者活用システムの整備

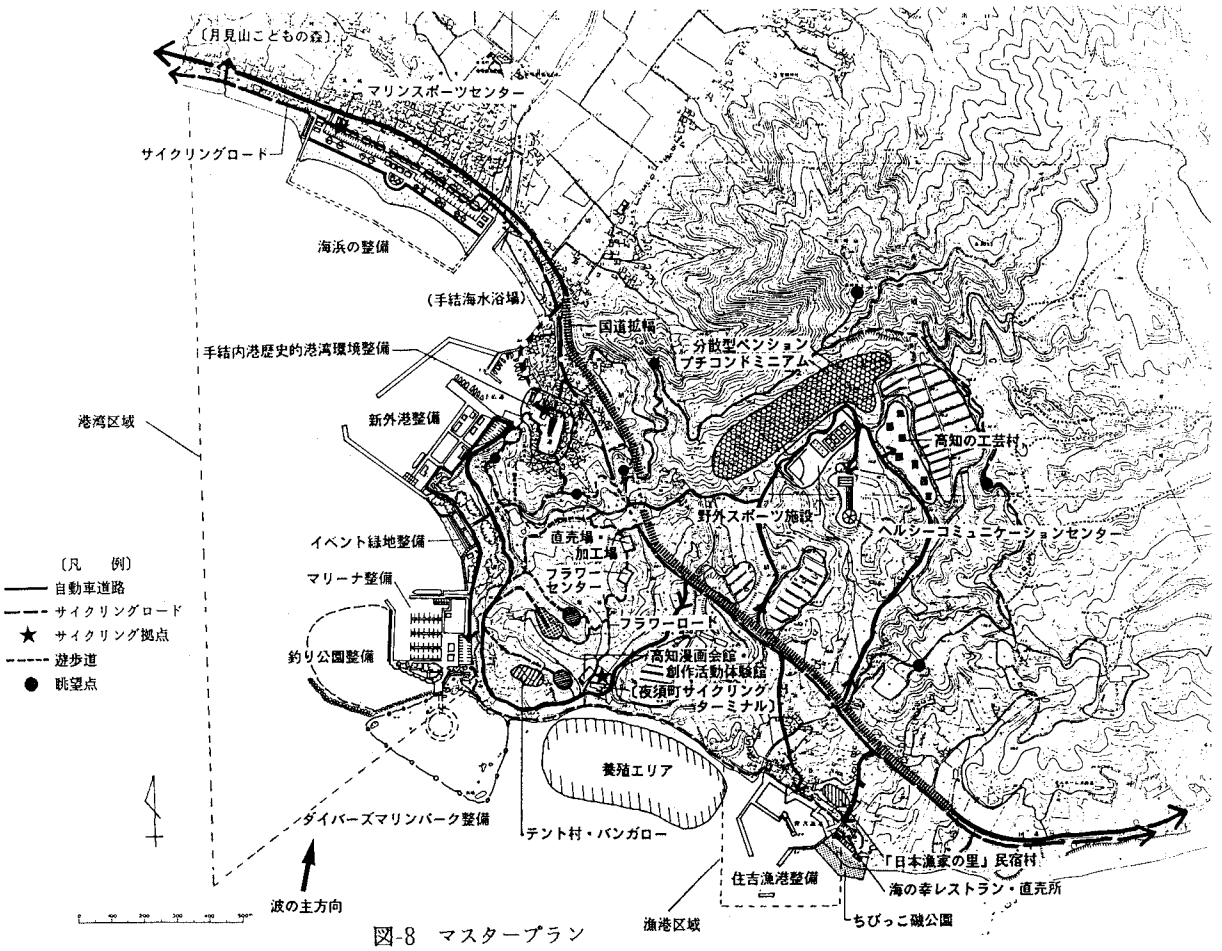

図-8　マスタープラン

(5)事業化における公共主体の分担と段階計画

事業化に向けての検討として、事業主体の問題とスケジュールの問題がある。事業主体としては、公共主体、民間主体、公民共同主体が考えられ、基本的に公共主体については基盤整備を、民間主体については収益部門を分担することになるが、公共主体がある部分を担保すれば、民間主体の参画が得られるものについては公民の共同方式をできるだけ進めていくことが必要である。右表に、整備内容別に公共主体の基本的な分担分を示すが、マークがないものについては民間主体、あるいは第3セクター等の公民共同主体の分担が期待されるものである。

また、計画は一度に事業化できるものではないため、当面整備していくもの、長期的に整備していくものに、時間的ステージを分けて実現化の段階を設定することが重要である。ここでは段階計画の設定根拠として4つの軸を設け、2段階（ステップ1、ステップ2）で実現の時期を考えた。その結果を右表に示す。

ゾーン	整備内容	公の分担	実現の段階		実現段階の設定理由			
			ステップ1	ステップ2	既存施設の活用	継性創造のための先行整備	潜在需要への対応	今後の社会動向への対応
A ゾーン	マリンスポーツセンター				○		○	
	香南観光センターの再整備				○	○		
	海浜の整備	○				○	○	
	プロムナード・駐車場	○				○	○	
	サイクリングロード	○			○	○	○	
	宿泊施設（サーファーズ・イン）						○	
B ゾーン	手結内港整備（歴史的港湾環境整備）	○			○	○		
	夏山記念館				○	○		
	新外港整備1（水産関連機能）	○					○	
	新外港整備2（多目的バース機能）	○					○	
	夏山放止公園	○			○	○		
	遊歩道・眺望点整備	○			○	○		
C ゾーン	イベント緑地整備	○						○
	マリーナ（クルーザータイプ）	○						○
	釣り施設（釣り公園）の整備	○				○	○	
	夫婦岩の整備	○			○	○		
D ゾーン	漁場整備	○					○	
	ダイバーズ・マリン・パーク					○		
	海岸遊歩道	○				○		
	海中遊歩道					○		
E ゾーン	住吉漁港整備	○			○		○	
	海の幸レストラン・直売所				○	○	○	
	「日本漁家の里」民宿村							○
	ちびっこ磯公園				○	○	○	
	海岸遊歩道整備	○				○		
F ゾーン	フラワーセンター							○
	直売所・加工場							○
	体験花園				○	○	○	
	フラワーロード・ポケットパーク					○		
	「高知漫画館」・創作活動体験館					○		
	野外宿泊施設							○
G ゾーン	プチコンドミニアム、ペンション							○
	ヘルシー・コミュニケーション・センター							○
	屋外スポーツ施設							○
	高知工芸村							○
	遊歩道・眺望点整備							○

(6)実現化に向けての取り組み

観光・レクリエーション開発については、極めて地域間競争が激しくなっており、そのような状況を切り抜けて、夜須町が四国の、ひいては日本でも有数の観光・レクリエーション地となるためには、以下のような基本的戦略を展開していくことが必須である。

①セールス戦略（現在、夜須町サイクリングターミナルとなっている旧塩谷臨海学校の機能の蘇生と、かつてのマーケットを対象とする需要の発掘。ゴルフ客の家族を対象とする招待券の発行。「夜須らぎの里」、「手結住村」などのキャッチフレーズによるＰＲ活動等。）

②イベント戦略（通年観光・レクリエーション地となるための、多彩で連続的なイベントの開催。）

③先行的な起業化戦略（機能低下している香南観光センターの再開発。地域住民の手による手結内港の修景。漁協直営「海の幸レストラン」の機能拡充。）

④地域間交流戦略（歴史的港湾保存連盟の設立による全国市町村間交流。）

⑤手結港ＭＴＰ基金の設立（人材育成、新たな商品開発研究、先進地視察等のための財源確保。）

⑥民間企業の活用（イベントのスポンサーとしての誘致。海洋開発関連機材の試験研究の場の提供等。）

〔まとめ〕

歴史的資源や観光・レクリエーション資源、また空港等へのアクセス利便性を有する手結港周辺を対象に、21世紀へ向けた活力ある地域づくりを進めるため、海域の高度利用を中心とした「手結港マリン・タウン・プロジェクト」を策定した。

プロジェクト策定に際しては、以下の項目に重点が置かれた。

① 海域がより多目的に活用された計画であること。

② 海域と陸域が一体となった計画であること。

③ 導入機能・施設の連携が考慮された計画であること。

手結港マリン・タウン・プロジェクトの基本方針は、以下のとおりである。

① リーディング産業を観光・レクリエーション産業とし、雇用力を高める。

② サービス型漁業の展開を進め、経営基盤の確立を図る。

③ 手結内港の修景に努め、地域のアメニティ向上を図る。

これら基本方針に基づき、海域では、マリーナ・人工海浜・観光船バース等の整備が、また陸域では内港地区の修景・整備、ペンション村、体験花園等の施設整備が位置づけられた。これら地区は、浜辺プロムナード・散策道路等の動線計画により、連携が図られている。これらの施設については今後詳細な検討を行い、順次、整備する予定である。

この計画の実現により、「海と遊びながら海と学ぶ」快適で魅力あふれる海辺のまち、マリン・タウンが形成されることになろう。

なお、本計画の策定においては、上森千秋高知大学農学部教授をはじめ、多くの皆様から有意なる助言をいただいた。

ここに深く感謝いたします。